

寛政四、定雅撰

志乃々々心

定雅撰



品之うい

歳旦集初懐紙ハ家くの

まうけくやく侍水ハこたふ

諸凡子カ秋の吟を帯め短す

筆にかいなうてかの春帖に

かへんなとおもふ

愚なる品之ういせん数の菊

硯の露路も香よにほ小宿

定雅

鈍雅



月しく水空さまくに秋閑て

至

葉落水涸岩岩かすかえ

唱

一しきり一しの温泉わきかへり

南嶺

そのまゝ癒る恙駒の疵

いはほ

ありがしめ軍の攻芽記さばや

嵐水

仮に身をく妹かかくれ家

亀ト

風呂敷をあて、味増する恋衣

嘯子

雪のはしよりこほす初ゆき

魯文

何いさる真理またよふ離れ船

蒲月

わさこ斜にたこし

尔松

光琳の己かふすまに筆とつて

其心

醒をおきなふ朝くの粥

土交

銀にしろなす情あさまし

倚川

はるさめ寒くしのふ古夫

米子

ち了花に月の朧も喰ふらす

鬼笑

すてに弥生も晝なんとす

錦羅

大東草文具子エーン特製

須磨の霧物音もせり明てあり
 いたつらに松は更けり後の月
 細代木に付たる火白し秋の水
 初汐や舟舟のもとの様の方
 何とやらん古さと恋し夕すす
 会伴いふ那智の岩象や秋の暮
 雨たふすは淋柿原や鴉の聲
 風雲よ日やさす秋の彼岸哉
 夕鳴子鳥いねくうを走けり

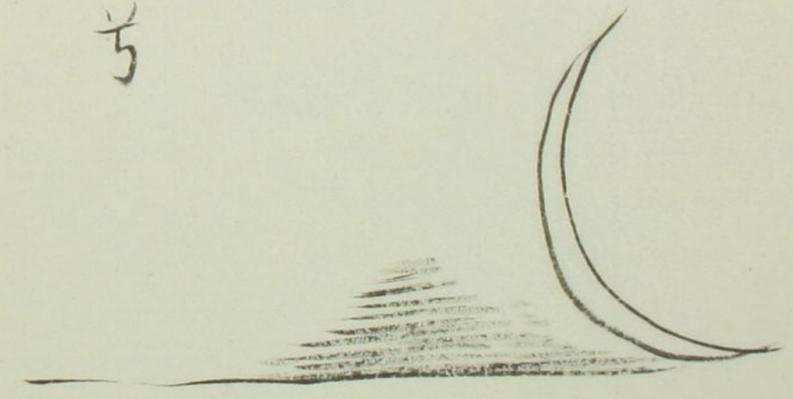
至 鬼笑
 唱 南嶺
 いはほ 鈍雅
 味子 米子
 結来

招文字

三

せりたる
 子 松
 ね

之方



豆引は夜の蜻蛉のまよけり
 岩倉や露まぬれ行物狂
 挑灯を袖にかくすや虫の聲
 窓の灯の草より低し露の音
 座あくやあやにくに秋の曉月
 ふるさとをしのふ夜更そ露の聲
 秋たちて初夕暮のあしし哉
 添叶の節まとなりぬ菊の香
 五伯
 在費
 蛭鳴
 錦程
 笠鳥
 其山
 土文
 滿月

〔大東京文具チエーン時器〕

落る日又秋の地行や鳥羽車
 朱の梳子又月かやや 在 糸
 干あみまかほる日影や秋の風
 後の月竹三竿の霜ま照る
 秋の夜や唯来て人りたし去り
 あきのち和瓦ま付てしまひりり
 たしなうぬこれとたくみか又為
 魯文
 吐云
 栗仙
 月崎
 臥史
 霜母
 東湖

(マニ)

ナヤ

眼のつかぬ秋の胡蝶と成りけり

春坡

のちの月暮るよみ中よいてるかふ

夢跡

日とあとよえのや鴉おく一里塚

孤秀

月のとくはよとほふかめん秋の鳥

毛筆

紅葉みしあしたの文や打もみち

杜梨

暮たれと鳴たつ秋の中ふへ哉

定雅

花すよ春きし道は赤かりけり

吳明

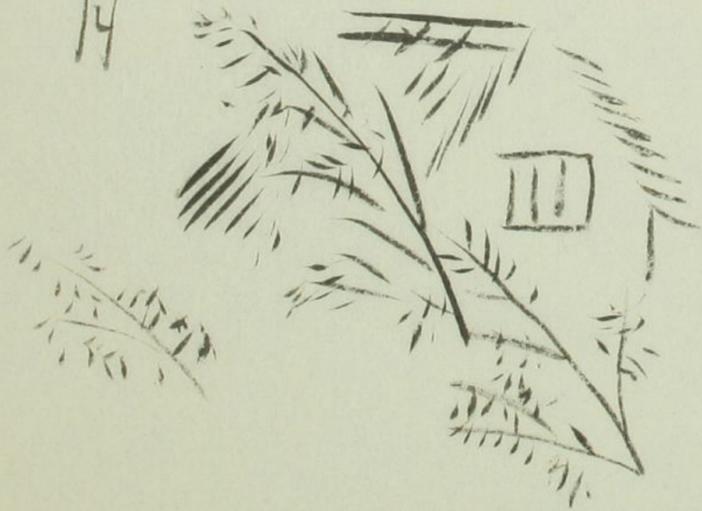
雀山夜字

起ておろ

雨

飛よかた

満月





山々して

水の

入りのみよ

の角

文鴨

夕
るの
尾
上
た
ふく
や
る
ふ
れ
五伯
麻



有
六
字

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 嶋 | 老 | ち | 山 | や | 宵 | 行 | 甚 | い |
| も | か | か | 里 | せ | は | 燈 | 夜 | つ |
| み | 身 | か | や | 藪 | 月 | の | 半 | ふ |
| ち | よ | ふ | き | の | は | う | の | ち |
| た | い | き | ぬ | け | は | し | 月 | と |
| り | た | す | た | ふ | つ | | | |

ほの月

あまの
玉の
山
路
の
風



暁子

いふは乃に

山出して

登りよ

免強哉

鑑
獅



東夷記

おきぬの
かゝ
油め
たぬ
は
妝の
う



魚文

有文字

笛ふけの孔より起るあまの風
 風川風やきぬたみたるいあとの里
 引浪まころかる月のほひか
 仁和寺の法師たつねん十三夜
 たんしよかきなす雨の小萩かふ
 落かけて一里退ぬかりの声
 あやにくに更ぬ雨夜の遠きぬた

月夜 青阿 百地 土卯 古塘 桃暉 其正

全

ほの月

更て

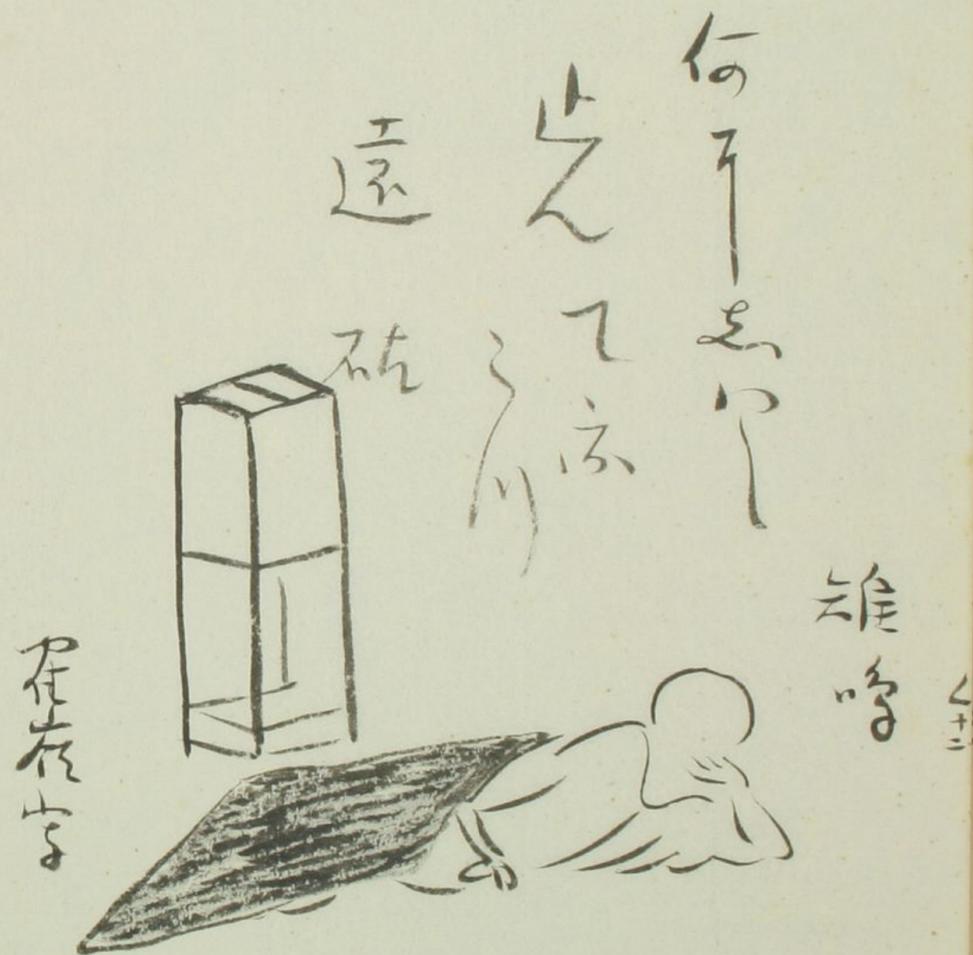
よさめよ

研の書

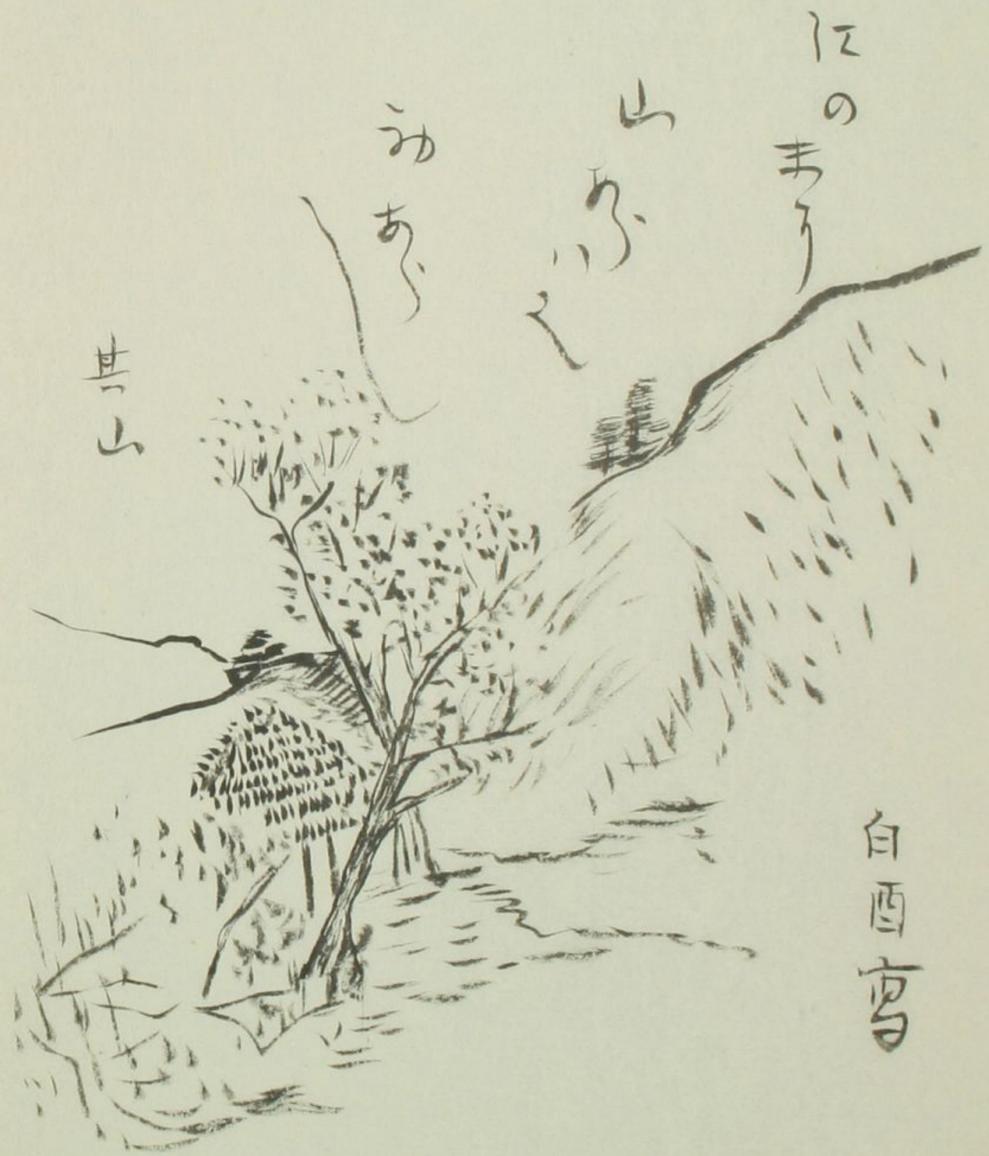
芙蓉



白面尊



九月廿日於輻湊亭共行
 一とせかの玉におもむく事の侍て
 誰やらか玉の葉多し須之の秋
 之今
 くもりし月もふるさ
 侍
 定能
 土蛭にはなつ暮目の露ちりまで
 菱湖
 袖かき合せ録中けり
 之
 さかつきに梅かゝふるし松のうろ
 定
 さのふけふ来し庭の始鳥
 菱



垣間 足は菊の太夫も春夜き

御嵐 あふ やよとす里下 の 春君

花ははや狐か穴は注連うちて

すつくり 言 の 一 手 の 砂

望来し衣わかちと 事 曉 に

喰 あ らしたる方丈 の 飯

は吹の深雪のうへに か き降て

寝はくれ島寒月を啼

之

定

菱

之

定

菱

之

定

(大東京文具チエーン特製)

祝言の あ 乞 ま 皮 や 炙 す ろん

夢 み もれ 出 る 釣 簾 の 節 の 子

何事も花 も の 川 は す 暮 ま けり

山 も か す み も みな 都 あり

右一折

秋の蚊の妹か寝息 ま の 水 けり

川 夢 や く 水 井 ふ かく 水 けり

た つ 水 来 し 瀧 は 洞 けり 初 紅 葉

菱

今

定

菱

湖南

騏道

穴月

早曉

落かゝる葡萄の棚や秋の風
 片隅へ灯を点けぬ 初あらし
 水鉢の臭いあはれや 秋の風
 涼月を真白き夜 寒かた
 霧の朝海にす鳥の行末哉
 さす汐の月を浪うつ砂金かた
 ちり初の日を又萩のふゆ哉
 草かりや暮を行あふ山法師
 子綿 何院 左 龜亭 左

さよ砧からす世帯も君と我
 雲の御秘法に踊る一夜かた
 古道や片輪車にきりきりす
 下戸なうぬおのこ少きをとりか
 舟さしこころまかす月みかな
 田を字をかゝし人の余情あり
 くろはしき鐘つく人も月の前
 如鏡 全
 五橋社
 行文字
 記笑 一吹 里籠 呂吟

(大東京文具チエーン特製)

ほくく

之ルハ

狩思

み

のぬ

白胡



白西草

△七

在茲 運頭

日や日や

十花うれまの

ひ

小雀

てかま



か何さる

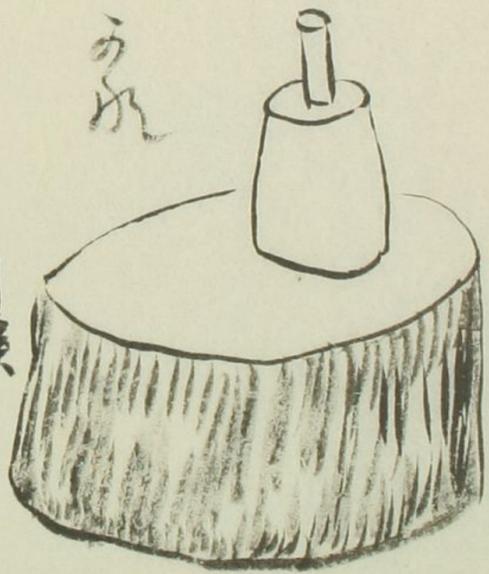
ゆひる

あやふれ

さあめさる

菱湖

△六



月溪

口きくは雲と吐き瓢川存

如蘭

萩原や咲揃子日の薄曇

一峰

秋の風とき水し雲の行おは

穉仙

水にまた水山また水けり鳴の月

其仙

白菊又露をきけり妙長庵

童孛

ちる事を又足了揃斗了哉

五雲

夜のおと紅葉おかと定之たり

現鬼

乾顔の廣葉さく水よ物書む

車蓋

後の月誰か明かたの闇をみお
関更

居つ、やの身を飲ぬけの秋
定雅

闇の厚味をと待て落るりり

おとひきやふ子の子の魂妻の鬼

雨ほろく小野小栗栢の又きぬた

飢鳥の声雲たか秋の山

くねんほにあつ日小春の日かや哉

至

よ修りの

破のそすみかえ

らと

のち

東画



御佛詣書林

京三條通所西
菊舎太兵衛

寛政四年冬

文信三章

とにかくに萩は声あり小夜時雨

チヨカ

士朗

北濱や水うつうへのほつしく水

チハ

旧玉

海山やみぬ世を経るの文しく水

ハヤ

玉屑

